

---

# 雨降るバス停

刹那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨降るバス停

### 【Zコード】

Z20400

### 【作者名】

刹那

### 【あらすじ】

雨の日にバス停で出会った少女。

その子はずつと自分の兄を待ち続けていた。

一人の少年と少女が織り成す、オリジナルストーリー。

その日は雨の日だった。

それもとてもすごい豪雨で、10秒でも雨の中にいれば全身びしょ濡れといったぐらい。

田舎の中学校に通う俺は、その下校時、雨の中を突っ切っていた。カバンを頭にかぶせ、少しでも濡れないようにと走った。

大きな雷が落ちるたび、体をピクつかせながら。

流石に体力も無くなってきて、どこか一休憩できるところはないかと、頭を巡らせた。

その時に浮かんだのが通学路に建つ屋根ありのバス停。あそこなら一休みできる。

そう考えた俺は息が途切れ途切れの中、バス停に向かった。バス停の中には一人の少女がベンチに腰を下ろしていた。見た目からして中学生といったところ。

走りこんできた俺を見上げ、ニコッと微笑んだ後、顔を伏せた。そんな少女がいる傍で俺は一人っきりで雨降るバス停で一休みした。

「なかなか止まないな」

空を見上げ、独り言を呟く。

バス停に入つて小一時間。一瞬でも雨は弱まらない。

そろそろ帰らないと……。

しかし、何で俺は雨が止むまで待っているんだろ？

体力回復の一休みのはずだったのに。

そう思って出し、雨の中をもう一度走る決心をついた。

「しゃつーーー！」

走り出さうとした瞬間。

「あのお

少女に呼び止められる。

「なんだ？」

「これ……使います？」

少女は一つの折り畳み傘を差し出してくれた。

「いや、これだけ濡れてるんだし、もつ良いよ。ありがとうございます！」

それだけ言って、俺は雨の中に入つていった。

家につく頃には、雨は止んでいた。

みたかった。

なんだか、気が合いそうな気がして。

いつの間にか、たどり着いていたバス停の中を覗いてみた。中には、一人の少女が腰を下ろしていた。

あの子だ……。

俺はバス停に入り、傘を閉じる。

傘から雪を落としながら、少女の前に立つ。

「よう」

「んん?」

少女が頬狂な声をあげて「こちらを見上げた。

「前会つたよな」

「え? 初めてかと……」

少女は頭を傾ける。

「まあ、覚えてなくとも無理ないわな……どこの学校?」

「豊丘中学」

「俺と一緒にやん! 何年何組? 名前は?」

「え、えと……一年一組、桂木千鶴」

「俺と同学年なのか……。俺、一度もお前を見たことないんだが」「私も」

「この一年間、一度も会わないというのもすこいものだ。つてか、ホントにこんな奴がいただろ?」

「お前は、バス乗つてどつか行くのか?」

「ううん。ただ、待つてるだけ」

「誰の事を?」

「お兄ちゃん。広島に行つたんだ。今日、帰つて来る日だから」

「ほつう~」

「広島にねえ……。」

「じゃあな」

「うん」

俺はバス停を出て、歩いた。

雨は簡単にだが、ポツポツと落ちてきている。  
傘は必要ないぐらいだ。

そういうえば、桂木に名前を教えてなかつた。

まあ、いいか。

明日、学校で会つんだし。

俺は家に帰つた。

だが、学校に桂木千鶴という女性徒は存在していなかつた。

その日、俺はバス停に走つた。

あの子一体なんなか。

それが聞きたかつた。

曇り空の下、道路を走りぬけ、バス停に駆け込む。  
中は、無人。

誰もいない。

そりやあ、桂木が必ずここに居るといつ保証は無い。

ただ、唯一の手がかりだから。

唯一、出会える場所だつたから来てみただけ。

なのになんだ？ この不信感は。

ここに、彼女がいないといつことがありえないと思つてしまつ。  
なぜだ？

雨が降り出したのか、バス停の上から不規則な音が聞こえる。  
俺は、一度、バス停を出て空を見上げた。

ポツポツと雨が降つてきている。  
ゆっくり、振り返つてみた。

すると、そこには一人の女性徒がベンチに腰を下ろしていた。

「桂木？？」

「え？」

桂木は顔をじらりと上げる。

「なんで、さつきまでいなかつたはずだ。なのにビリしてへ。」

「へ？」

素つ頓狂な声を上げる。

そんな桂木に近づき、俺はそつと桂木に手を伸ばした。だが、桂木には触れることできずそのまま素通りする。体を通り向けた？？

意味がわからない。

「お前……一体」

「なんなの？ 君は誰？」

桂木は俺に言つてきた。

君は誰？ ……だと？

たしかに名前は教えなかつた。

だが、ここまで他人に聞くよつた感じでいつものか？？

違う。

そうか。

彼女がもし存在していないのなら。

幽霊だとしたら。

今日を、兄貴が帰つてくる日であると思い込み、そして延々とその日をループしているのだとした。り。

記憶が毎回、リセットしているのだとしたら。

なら、全てのつじつまが合つ。

体に触れられなかつたこと。

学校に存在していなかつたこと。

いきなり、姿を現したこと。

そして、毎回俺のことを覚えていないこと。

そう、全てのつじつまが合つ。

「なんなの？」

「あ、あの……」

彼女のことはほつとけない。

成仏つていうのかは分からぬが、とりあえず、安らかに逝つて欲しい。

なぜか、そう思つ。

なにか、良い方法は……。

あ、そうだ。

「お前つて、兄貴を待つてるんだう？ どんな奴なの」

「なんで、そのことを」

「良いから、言つてくれ」

「……優しくて、かつこみくて、私を大事にしてくれるお兄ちゃん。いつもかっこつけてジーパン履いて、そうだなあ、顔は君に似てる。カッコさえ真似ればそっくりさんかも」

よし、使える。

「んじや、ありがとわん」

「え？」

俺は雨の中、道路を走つた。

彼女を、逝かすために。

ただいま、俺はチャリで隣町まで行き、ジーパンを買って、それに合づ服を着て、自分の家の近くにあるバス停にバスで向かつてい

る。

窓からは雨が降っている外が見える。  
俺は、彼女が待ち続ける兄貴として、今、彼女のいるバス停に行  
つている。

きっと、今も彼女は待ち続けているはずだ。  
だから……。

「 プシュー 」

バスの扉が開く。

俺はゆっくりバスを降りる。

案の定、彼女は座っていた。

桂木は目を見開き、俺のことを見てくる。

「 お……兄ちゃん? 」

「 あ……。 ただいま 」

「 おかえりりりり!! 」

思いっきり飛びついてきた。

なぜか、桂木の姿には実体があった。  
「 ずっと、ずっとまつてたんだからあ 」

「 ごめんな 」

「 お兄ちゃん…… 」

桂木の姿が薄れしていく。

「 もう、どこにも行かないでね 」

「 ああ 」

完璧に姿が無くなる。

そこは、誰もいないバス停になっていた。

と、

俺の記憶にはこの事は残っていない。

分からぬが、ここ数日前のことが完璧に切り離されて、全く、思い出せない。

一体、何があつたのかも。  
チャリがどこにいったのかも。

なんともおかしな話だ。

いつも、学校帰りに通るバス停を見るたびに、なにかが心に引っかかる。

なにかがあつたのかな。  
この数日前に。

だめだ。

ノイズがかかつていて、思い出せない。

だから、一体何なのかを突き止めるため、俺はバス停のベンチに座つてみた。

なんか、懐かしい気がする。

すると、ちょうど良く、バスが止まる。  
バスから少女と青年が一人ずつ降りてくる。

その二人はとてもたのしそうに話し合っている。  
少女の顔に見覚えがある気がするのは、気のせいだろうか。

俺は、二人の少女と青年の楽しそうな光景を目に見て、いつの間にか頬を緩めていた。



(後書き)

ちゅうと、適當あきたかもです。  
すいません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2040o/>

---

雨降るバス停

2010年10月9日00時55分発行